
私と天使とシンデレラ

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と天使とシンデレラ

【Nコード】

N2554N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

天使とシンデレラに出逢った少女はどうなるでしょう？

(前書き)

息抜きにとつぞ。

昔、昔のお話です。

ある国に一人の女の子がいました。

あまり裕福な家庭でもなく、そうかと言って仲の悪い家族でもありません。

でも、ある時、少女は空を飛ぶ鳥を見て思いました。

「私もあんな綺麗な空を飛べ羽が欲しいわ。」

すると、そこへ天使が現れ、少女に白い綺麗な羽をくれました。

少女はそれで何処へでも好きな所へ行く事が出来るようになりました。

空を飛びながら少女が見つけたのは、綺麗な立派なお城でした。

「いいな、私もあんな大きなお城のお姫様になりたいな。」

すると、そこへシンデレラが現れ、

「私の片方残ったガラスの靴を使いなさい。」

と、少女にガラスの靴を差し出しました。

「ありがとうございます。」

少女はその靴のおかげで、空から眺めていたお城の王子様と結婚できました。

「ありがとうございます、天使様、シンデレラ。」

少女は何不自由のない生活に幸せを感じていました。

だけど、少女には天使とシンデレラとの一つの約束がありました。

それは、自分が幸せになった分、周りの人々をもっと幸せにしてあげる事でした。

その国は少女がいた国より、国民は貧しい国でした。

「どうしたら、みんな幸せになれるんだろう。」

少女は考えました。「そうだ。王様はお金持ちだから、王様のお金をみんなに分けてあげればいいんだわ。」

人々が一生懸命羊を売ったり果物を売ったりして生活しているの

を少女は知っていました。

少しか、王様のお金をみんなに分けてあげれば、きっとみんなの生活も苦しくなくなると思うわ……

少女はそう考えたのです。

始めの1年。

少女は国民の一人に金100枚を与えました。すると、人々はパンとスープだけの食事だけでなく肉や野菜も食べられるようになりました。

その次の年。

少女は同じように、国民一人に金200枚を与えました。国民の家々が木で作った家ではなくお城と同じ石で作った家になりました。そして、3年。

少女は、国民一人一人に金300枚を与えました。すると、人々は綺麗な靴や服を着て、王室と同じような生活出来るようになりました。

「これで、みんな幸せだわ。」

少女はそう思いました。

しかし、今度は王室のお金がほとんど無くなり、そして国民は働く事を忘れてしまいました。

「まあ！どうした事でしょう！」

天使からもらった羽とシンデレラからもらったガラスの靴をはきながら少女は、ただお城の窓からそんな国民を見るだけしかありませんでした。

「こんなのが幸せなの？」

毎日毎日ワインを飲んで、遊びまわっている国民を見ながら、少女は考えます。

そして、少女は王子様に、

「どうしたら、元に戻せるの？」

「元に戻ったら、また貧しい生活の国民に戻ってしまうよ。」

王子様はお城以外の生活を知りません。

働いて、お金を貰う事を知りません。

食事や衣服、もちろん住む所にも不自由になった事ありません。少女は、天使とシンデレラと出会う前は、普通の果物売りの少女でした。

「やっぱり、これって天使様やシンデレラが言っていた幸せとは違うわ。」

少女は気付き、

「天使様。」

と、空に向かって叫びました。

「どうかしたのかい？」

少女と同じ白い羽を付けた天使は、空から少女の部屋へと舞い降りて来ました。

「シンデレラ。」

そう言うつと、背後の鏡の中からシンデレラが現れました。

少女は今のこの国の事を2人に話しました。

そして、それは全部自分のせいだと話し、

「何かいい方法がないかしら。本当に皆が幸せになる方法。」

そうすると、天使が、

「いい事を教えてあげるよ。」

と、「このお城から見える山にダイヤモンドがいっぱいいるんだ。それで皆を幸せにしてあげれば。」

「そうよ。でもね」

シンデレラが口を添えました。「これは貴方がやらなければならぬ事なのよ。」

「私が？」

少女は驚きました。もちろん、少女は大きな力も何も持っていない。一人でダイヤモンドの山を掘る事などできません。

「私に出来るかしら。」

少女がそう言うつと、天使は、

「出来るよ、君なら。」

そう言って微笑みました。

「わかったわ、天使様、シンデレラ。」

少女は強く頷き、「これからみんなの所へ行って来る。」
窓から空へ飛び立ちました

それから少女は空から、

「みんな、大切な話があるの。お城の前の広場に集まって！」
それに気付いた国民は、

「王女だ。」

「王女様だ！」

ぞくぞくとお城の前の広場に集まって来ました。

少女は国民の前で、王様や王子様に向かって謝りました

「みんな私のせいなの。働く事を忘れさせてしまったり、贅沢だ
け与えたりして。」

王様や王子様にも、

「私は本当はシンデレラじゃないの。この靴はシンデレラからも
らったの。」

「なんだって？」

みんな少女の言葉に驚きました。

「この羽も」

と、背中の綺麗な羽を指差し、「天使様が下さったものなの。」

またまたみんな驚きました。

「だけど、一つだけお願いがあるの。」

少女は頭を下げ、「このお城の向こうにある山にダイヤモンドが
沢山埋まっているの。それをみんなで掘って、他の国に売って、そ
れで皆幸せになりましょう！」

「本当かね？」

「本当？」

みんな信じられない風でした

すると少女はガラスの靴を脱ぎ、

「みんなスコップを持って、私についてきて。」

国民は一度家に戻り、スコップを持つと少女の後を追いました。
王様と王子様も一緒です。

「ここよ。」

少女が指差す先を国民の一人が掘ると、

ゴツン

何か、固いものにあたりました。

「何だろう。」

国民が少女の指差す先を掘って行くと、ぞくぞくと太陽よりも眩しい、ダイヤモンドが沢山出てきました。

「これは、すごい！」

「羊や果物よりも売れるぞ。」

「船を造ろう！そしてあの海の間こうまで運んで売ろう！」

国民の瞳にダイヤモンドの煌めきよりも映える『輝き』が戻って来ました。

国民は贅沢な生活をやめ、まずは羊を売って王室にお金を返す事を始め、片方ではダイヤモンドを掘り、また片方では海の間こうに渡れる船を造る作業を始めました。

国はあつという間に、活気を取り戻しました。ダイヤモンドの話を聞き付けた商人もこの国を訪れるようになり、交易も盛んになりました。

「みんな君のおかげだ。」

王子は少女に言いました。

「いいえ。」

少女は優しい王子に微笑み返し、「みんな天使様とシンデレラのおかげよ。」

2人で城の窓から生き返ったような国民の姿を見つめました。
それから数カ月後。

国が交易とダイヤモンドの採掘で豊かになった頃、

「天使様。」

少女は天使を呼びました。

「なんだい？」

ひらり、と窓の向こうから彼は舞い降りて来ました。

「私にくれた羽を返したいの。」

少女は天使に言いました。

「本当にいいの？」

「ええ。」

それから、今度はシンデレラを呼びました。

「何かしら？」

鏡の中からシンデレラが出て来ました。

「このガラスの靴を返すわ。あなたが本当の王女様になって。」

「いいの？」

ガラスの靴を手に取り、シンデレラは尋ねました

「私はもう十分幸せだから。」

それは、この国の国民の笑顔と活気。

豊かになり、働く事の嬉しさを取り戻してくれたこの国の国民。

それは、少女の宝物となりました。

「私、家に帰るわ。」

少女は天使とシンデレラにそう告げました。

「私の国だって」

肩を竦めて微笑む少女。「きっと宝物があるわ。今度はそれを探

しに行くの。そして、本当の私の王子様を見つけるの。」

「そうかい。」

「そうなの。」

天使とシンデレラは同時に言いました。

それから2人は顔を見合わせ、シンデレラは、

「私のかばちの馬車で行く？」

天使は、

「僕が連れて行ってあげようか、この僕の羽で。」

そう言いましたが、

「いいえ。」

少女は首を振りました。「今度は自分の足で歩いて行きます。」

空には、眩しい太陽。

一筋の雲。

これは、遠い遠い昔の物語・・・

<おしまい>

「ねえ、ママ。」

台所で夕食の支度をする母に、その少女は絵本を抱えて、「この話、続きはないの？」

「ないわよ。それで、終り・・・さあ、もうパパが戻って来るからお部屋をお片づけして。」

窓からは微かな月明かり。

「やだ、続きが欲しい！」

そう白いエプロンを後ろから引つ張る少女に、

「じゃあ、美奈子だったらどうする？」

笑いかける母。

「美奈だったら・・・」

小さい頃から絵本が大好きな美奈子も、今はもう小学2年生。自分で『かたこと』の話しを作る事もある。

「美奈だったらね・・・」

少し、首を傾げ、「そうだ！」

部屋へ戻り、急いで鉛筆を取る。

<つづき>

「天使よ。」

大天使様は少女に羽をあげた天使に言いました。「これで、お前は100個の『想い』を叶えた・・・これからは『堕天使』の地位

をやめさせ、『天使』に戻る事を許そう。」

「いえ。」

天使は言いました。「僕を人間にしてください。あの少女の所へ行きたいのです。」

「それがお前の望みか？」

「はい。」

「しかし『人間』にはなれぬぞ、『堕天使』であつた『過去』がある為。もしかして、お前の『真の姿』を見たら、その少女は恐れおののくかもしれぬぞ。」

「それでもです。」

天使は――堕天使は微笑んだ。「見守るだけでいいのです。」

「王子様、お願いがあります。」

ガラスの靴をはいたシンデレラは白いドレス姿で、王子に向かい、「私に小間使いを付けて下さいませ。」

「なんでだね？もう沢山いるのではないか？」

「いいえ。」

王子の言葉にシンデレラは首を振りました。

「私には沢山の姉もいますけど・・・・このお城では『友達』がいません。」

「そうか・・・・誰か心辺りがあるのかい？」

「ええ！」

シンデレラは目を輝かせました。「あなたも良くご存じの少女です。」

「ちょっと待ってよ、姉さん！」

天使から羽をもらった少女、シンデレラからガラスの靴をもらった少女は、一つ上の姉を追って森の中を走っていました。

木の実を集めている最中でした。

「そこへ『かぼちゃの馬車』が来るの。」

馬車をひくのは天使様。

乗っているのはシンデレラ。

「迎えに来たよ。」

「迎えに来たわよ。」

2人は言いました。「少女。あなたたち家族全員をお城に入れてあげるわ。これからはお友達となつて一緒に遊びましょう。」

「シンデレラ・・・天使様。」

少女は目を丸くしました。少女の家はある国の森の片隅にある丸太で作った家。

「私たち家族全員？」

少女は問いかけました。シンデレラは、

「そうよ、大勢の方が楽しくていいでしょ？歳の上の子も下の子も。」

「それで、みんな幸せになつておしまい！」

ピシッと、鉛筆を回しながら美奈子は、その紙を台所の母の元へと持つて行った。

「パパ、帰り遅いわね。」

料理の盛り付けをしながら、母が呟く。

「ねえ、ママ、見て！」

「今、忙しいの。」

「美奈続きつくつたんだから。」

と、その紙を見せる。

「どれ？」

母はやつと顔を上げ、その紙を見た。

「あら。」

急に表情の変わる母。

「ねえ、どう？その続き。」

「続きって」

母は紙を美奈子に見せ、「何にも書いてないじゃない。」

「え？」

美奈子は慌てて、母の手からその自分が書いたはずの『つづき』を奪い取った。

真っ白だった。

「………」

口を尖らせ、黙りこくる美奈子。

そんな風景を見守る人が一人いた。

それは、夜の闇に紛れて。

マンシヨンの脇の樹の上で、3人。

「『つづき』は無しだね。」

天使がくすくすと笑う。

「そうよね、私たちは『物語』の中の人物だから。」

シンデレラがドレスの裾を夜風に靡かせ、言葉をつなぐ。

「『本当の事』わかつちやったら、『物語』じゃなくなるもの。」

お城で今は家族と暮らしている少女が微笑んで言う。

そして、3人は声を揃えて、

「『つづき』は後で。」

<おしまい>

（後書き）

いかがでしたか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2554n/>

私と天使とシンデレラ

2010年10月10日03時54分発行